

哲学的言語の克服されざる根本要素としてのメタファー  
——ブルーメンベルク「メタファー学のテーゼ」講演について

下 田 和 宣

## はじめに

2022年に『メタファー学のパラダイム』<sup>(1)</sup> (*Paradigmen zu einer Metaphorologie*。以下『パラダイム』)が翻訳されたことは、ブルーメンベルク (Hans Blumenberg, 1920-1996) の日本における受容において画期的な意味を持つと言えよう。『近代の正統性』や『神話の変奏』などのいくつかの既翻訳によって得られるイメージから、ブルーメンベルクはこれまで戦後ドイツの思想史家として紹介されてきただろうし、「メタファー学」(Metaphorologie、隠喩学)と名づけられたその浩瀚な歴史記述の背後にある思想や、個々の分析や考察を支えているはずの哲学的な態度についてはあまり話題にはならなかったように思われる。唯一の例外はブルーメンベルク自選の論文集である『われわれが生きている現実——技術・芸術・修辞学』(村井則夫訳、法政大学出版局、2014年。ドイツ語は1981年)の邦訳である。しかしこの著作にもまた意図的な断片性があるため、それを手引きとしても、ブルーメンベルクの思想のコアを取り出すことが容易になるわけではなかった。それに対して比較的初期の『パラダイム』は、当時のドイツで発進しつつあった「概念史研究」(Begriffsgeschichte)をめぐる論争という背景のもとで「メタファー学」の綱領としての性格を明確に与えられた著作である。本書は「これからなされるべき「より深い探求」のための予備的作業」(『パラダイム』8)であり、彼がなぜ他の諸著作に見られるところの一見迂遠な思想史記述を重ねるのかという当然の疑問に対する自己弁明を、日本の読者もようやく手にすることができるのである。

とはいえ「メタファー学」への入門的な性格を持つ『パラダイム』全十章もまた単なる原理の提示では済まされず、さまざまな素材の検討を含みこんでいるため、容易に読み通すことのできるものではない。そこで本論文では、

さらにもうひとつの補助となる資料をもとに、「メタファー学」についてより簡潔に、その骨子となる部分を取り出してみたい。1960年の『パラダイム』出版に先立って、ブルーメンベルクは1957年に論文「真理のメタファーとしての光」を「メタファー学」初の実践として世に問うた。その翌年の1958年、彼はロータッカーやガダマーの主宰する「概念史評議会」の第一回研究会（ユーゲンハイムで5月30日から6月2日にかけて行われた Tagung）で「メタファー学のテーゼ」（Thesen zu einer Metaphorologie）という題の講演を行っている（以下「テーゼ」講演）<sup>(2)</sup>。「テーゼ」講演は二年後の『パラダイム』出版に備えるものであり、しかも「メタファー学」の研究理念をわずかに七つのテーゼによって可能な限りコンパクトに提示したものである。たしかにひとつひとつの主張は詳細に検討されなければならないものであるが、「メタファー学」が全体として何を狙うものであるか、ということに関して言えば、「テーゼ」講演以上に直観的な明瞭性を備えた資料は存在しないと言えよう。したがって本論文では「テーゼ」講演を中心として、『パラダイム』など他の資料を補助に、ブルーメンベルク「メタファー学」がいかなる試みなのかを明らかにすることにしたい。

## 1. 第一テーゼ——デカルト的理想とメタファーの相性の悪さ

では、「テーゼ」講演の内容を第一テーゼから順に確認していくことにしよう。

### I.

もし仮に、デカルト以降の哲学の歩みがデカルトのプログラムに従っ

て遂行され、彼が可能であると確信していた最終的な締めくくりへと到達したとするなら、『方法序説』の第一規則に従って、次のふたつの帰結が生じるになるに違いない。

1) 哲学に究極の状態があるとするれば、それは比喩的な語りを持つすべての要素から解放されているはずである。純粹に装飾的で修辭的な形式を除いて、すべてを定義することができるのだとするれば、すべてを定義しなければならぬということでもある。そこでなお存在するのはただ嚴密な意味での術語法だけであろう。

2) 定義で満たされたこの概念の世界の歴史を研究するにしても、その作業を正当化しうるような意味はもはやないだろう。わたしたちが用いる諸々の概念に含みこまれており、そこにいわば「蓄えられている」歴史とは、諸対象の完全な現前（現象学的に言えば自己所与性 Selbstgegebenheit）としてのデカルト的な明晰さを、歴史的に制約された観点から「射映 abschatten」し、妨げるものにほかならない。「明晰さ」とは内在的・目的論的に歴史性を弱体化させる理想なのである。(Thesen 186-187)

著作『パラダイム』の冒頭とほぼ同じく、哲学研究に対するデカルト的な「最終目標」の確認から議論が始められている。「この最終目標は、デカルトの『方法序説』での四つの規則、とりわけ「判断で把握された事柄はすべて明晰・判明でなければならない」という第一規則に従って定義されている」（『パラダイム』1）。哲学の「最終」状態についての理想は論理的・実践的に「暫定的なもの」から解放され、明晰判明な概念によって形成される学的体系としての「術語法」（Terminologie、概念論）の確立を意味する。

こうした見解について、ふたつの観点から批判的吟味がなされる。まず、

哲学の理想的な最終状態において、メタファーをはじめとする転義的・比喩的な語りはどうなるのか。それはもはや必要のない未熟な言語使用として排除されるべきものなのか。この問題提起はブルーメンベルク「メタファー学」の基本的態度を設定するものである。次に、完成した「術語法」にとって、それに至るまでの哲学の歴史はどのように扱われるのかが問題となる。「術語法」が完成するという事は、たしかに歴史的な出来事であろう。しかしながらそうした成立経緯は「術語法」に内在的な問題ではありえない。むしろ「術語法」に特殊な歴史性を仮定することは、それがようやく獲得したところの「明晰さ」を毀損してしまうことになる。このようにして、デカルト的な哲学は歴史の意義を弱体化させる、とされている。

とりわけ歴史に関するこのような注釈がここでなされるのは、ひとつには、哲学と哲学的概念の歴史に関する研究を基礎づけ推進しようとしていた「概念史評議会」の狙いに応答するためである。哲学か哲学史かの二者択一は概念史研究の意義——すなわち何のために哲学史を研究するのか——に関するジレンマである。同時に、歴史性は以前よりブルーメンベルク自身の中心的な課題のひとつであり<sup>(3)</sup>、以下に見るように、「メタファー学」の根幹に迫る問題でもあった<sup>(4)</sup>。

## 2. 第二テーゼ——遺留物的メタファーと絶対的メタファーの区別

続いて第二テーゼの検討に移ろう。

### II.

どのような条件のもとなら、比喩的な語り（術語法的な規範に対して欠如しているものという最も広い意味におけるメタファーの使い方）が哲学的言語において正統であるとされ、それによってメタファー学が概念史研究を統合する要素となりうるのだろうか。

1) 「神話からロゴスへ」の途上にある遺留物 (Rudimente) のような、残滓 (Restbestände) としてのメタファー。そのようなメタファーは統制的理念との関連で哲学の歴史的状況の暫定性を指し示す。メタファーのこの使い方は非本来的な語り方だが、それを研究することは批判的反省として役立つ。

2) 哲学的言語の克服されざる根本要素 (unüberwindbarer Grundbestand der philosophischen Sprache) としてのメタファー。つまりは転義の領域から「連れ戻す」ことができないと証明される、絶対的メタファー (absolute Metaphern)。概念へと解消することの不可能な言表機能を持っているような絶対的メタファーの存在が示されうるなら、そのような諸々のメタファーを確定し分析することは、概念史研究の本質的な部門となる。

メタファー学のパラダイム論が持つ課題とはまず、「絶対的メタファー」を想定しうる諸領域を画定することである。次に、機能の違いに着目することで遺留物的メタファーと絶対的メタファーとを構造分析的に比較すること、ならびに分析方法そのものの吟味がなされるべきである。そのあとではじめて、メタファーの歴史に関する諸々の課題と、メタファー学の体系論の可能性についての問いが現れる。(Thesen 187)

ここでメタファーに対するふたつの捉え方が提示される。まずは、デカルト的な哲学の理想によって理解されるメタファーのあり方である。この視点

からすれば、メタファーは事象に対する未熟で暫定的な理解を示すものであり、いずれは明晰判明な概念に解消されるべきであり、あるいはせいぜいのところ文飾的な修辞技法としてのみなお許容されるもの、と位置づけられる。この意味で捉えられたメタファーは途上段階における考察の「遺留物」ないし「残滓」と呼ばれている。それに対して、転義的な語りから明晰判明な概念へと還元されることのないメタファーが、「絶対的メタファー」とされる。この「絶対的メタファー」こそ、ブルーメンベルク「メタファー学」にとっての本来的な主題である。ここで言われる「絶対的」(absolut)が何を意味するのか、どのような視点から扱われるべきものであるのか、ということについては以下の、とりわけ第三テーゼでまとめられているところである。

ブルーメンベルクはここでひとまず独断的な表明を控えながら、「絶対的メタファーの存在が示されるのであれば」と慎重な言い方をしている。「絶対的メタファー」が持つ哲学的な意味についての思弁的な考察に移る前に、まずはそれが実際に語られている場面を特定し、遺留物的メタファーとの本質的な区別をなす必要がある。この課題をブルーメンベルクは「メタファー学」の「範例(パラダイム)論」と呼び、「メタファーの歴史」に関する考察、および「メタファー学」の本来的な研究作業としての「体系論」(Systematik)と分けて提示している。「メタファー学」の予備学としての「パラダイム論」について、『パラダイム』では次のように述べられている。「メタファー学の「範例〔パラダイム〕論」(Paradigmatik)とは、これからなされるべき「より深い探求」のための予備的作業を課題とするにすぎない。その予備的考察は、絶対的メタファーが潜んでいると思われる領域を見極め、絶対的メタファーの確定基準を考察するものである」(『パラダイム』8)<sup>(5)</sup>。

### 3. 第三テーゼ——絶対的メタファーの「絶対的」という性格とそれを研究する意義

#### Ⅲ.

「絶対的メタファー」という呼び方が意味するのは、それを余すところなく論理的に把握することはまったくできない、ということだろう。絶対的メタファーの語る内実が、転義 (metaphorá, translatio) の領域を越えて分析されることはない。主要な隠喩的なイメージを完全に置き換えてしまうのでは、その分析は理解不能で根拠のないものになってしまう。

絶対的メタファーが絶対的であるのは、ただ術語法の要求との関連においてのみでそうなのであって、次のふたつの別の観点においてはそのかぎりではない。

あるメタファーは別のメタファーによって置き換えられうるし、代理されうる。また、より正確なメタファーによって修正もされうる。しかしそれはある特定の活動空間 (Spielraum、余地) においてのみなされるのである。それを画定することがメタファー学の体系論の内部では可能であるはずだろう。

メタファーは歴史をもつ、しかも概念よりも根元的な意味で。メタファーの歴史の変遷は、歴史的な視覚様式、究極的な根拠づけ、感覚地平そのもののメタ運動論を出現させる。それはその根元性においてもはや比較の図式に——ここでは術語法的な明晰判明性の進展という図式に——あてはめることができない。それゆえ歴史学的メタファー学において (In der historischen Metaphorologie) 本来的な主題は歴史の歴史性その



もの (die Geschichtlichkeit der Geschichte selbst) なのである。方法論的に見れば、メタファー学は狭義の概念史である「術語法」に役立ちうる。(Thesen 187)

ここでは「絶対的メタファー」の「絶対的」ということがどのような意味であるかが明確化され、さらにそれを研究することの意義が述べられている。第二テーゼに続き、ここでもまた、「絶対的メタファー」が論理的概念に還元されることのない、「隔絶」ないし「孤絶」した役割を果たすものであることに注意が向けられる。つまり、形而上学的な意味内容の転義であるような、何か特権的で超絶的なイメージを持っているから、そのメタファーが「絶対的」であるというわけではないのである。ブルーメンベルクはメタファーが転義する内容ではなく、むしろその働き方に着目している。デカルト的な「術語法」による明証性の要求を拒みながら、もっぱら自身のダイナミズムに従うメタファーの機能的な独自性が、ここで取り出されようとしているのである。

このように自立的であるがゆえに、メタファーは「歴史をもつ」と言われている。さらにそれが「しかも概念よりも根元的な意味で」歴史をもつ、とされていることから、平板化されがちな「概念史研究」への挑発もまた読み取ることができる。たしかにこのテーゼの末尾には「メタファー学」が「概念史研究」に役立つと付け添えられているが、問題の深度を考えればこれは講演上のリップサービスに過ぎないと見るべきだろう。決定的なのは、「メタファーの歴史の変遷」が「歴史的な視覚様式、究極的な根拠づけ、感覚地平そのもののメタ運動論 (die Metakinetik geschichtlicher Sichtweisen, Letztbegründungen, Sinnhorizonte selbst) を出現させる」とされている点であ

る（同様のことが『パラダイム』序論の末尾にある）。ものの見え方、考え方、感じ方が歴史的にどのように移ろい変遷するのか、この運動の基層を明らかにするのが「メタファー学」全体の課題である。このような視座を設定することで、ブルーメンベルクは「術語法」的思考と、その理想を共有する「概念史研究」から決然と離反しつつ、独自の思索の道を歩み始める。「メタファー学」とはまさに、明晰判明な概念に依拠する従来の哲学的思考および哲学史研究の作業が、本来的に依拠している深部を開示しようとする試みであると言えよう。「絶対的メタファー」の存在が、そのような思考の深層領域が実在することの証拠となる<sup>(6)</sup>。

このような理解に基づいて、『パラダイム』序論の締め括りでは次のように続けられている。「メタファー学は思考の下部構造（Substruktur des Denkens）へと遡り、体系的な結晶群の基底ないし析出層へ（an den Untergrund, die Nährlösung der systematischen Kristallisation）の接近を試みる。そしてまた、精神が自らの像（イメージ）を先取りするにはどれほどの「果敢さ」（Mut）が必要であるかを自覚し、さらには、歴史を描くにはどれほど大胆な推測（Mut zur Vermutung）が求められるかを、身をもって示さなければならない」（『パラダイム』8）。まさしくここに、「メタファー学」という試みのもつ哲学的な射程が示されている。ブルーメンベルクの「絶対的メタファー」論は哲学的思考に対して修辞学的イメージを対置しているのではなく、むしろ両者の有機的な階層構造を把握しようとしているのである。では、「絶対的メタファー」はいかなる機能を持ち、何をどのように思考へと提供するのだろうか。続く第四テーゼでは、それについて簡潔に語られている。

#### 4. 第四テーゼ——問いへの答えとしての絶対的メタファー

##### IV.

絶対的メタファーを分析するといっても、それはロゴスへと「廻行的な仕方

で翻訳する」ことを意味するものではありえない。分析の成果はむしろ、諸々の問いを開示することに求められる。諸々のメタファーにおいてすでに答えが探られている、そのような問いである。これらの問いが明示的に、それどころか体系的な帰結のうちで立てられているものとして、メタファーを産出した、あるいはより正しくは「挑発」したということが重要なのではない。それらはむしろ前体系的な性格をもつ問いである。その志向充実はほとんどいつも体系的に明示されえない。「真理とは何か」という古来の問いに答えようとした定義のどれもがどれほど貧しいものであったことか。それに対して世界の意味の豊かさのすべてはメタファーによって生き生きとしたものとなった。(Thesen 188)

「絶対的メタファー」とは問いに対する答えであり、しかも「その志向充実はほとんどいつも体系的に明示されえない」ような「前体系的な性格をもつ問い」(Fragen präsystematischen Charakters) への応答であるとされている。概念によっては原理的に答えることのできない問いがある。まさしくそこにメタファーが導入される余地がある。ここで挙げられている「真理とは何か」という問いは、ブルーメンベルクによれば、メタファーを要求するそのような問いの典型である。すなわちこの類の問いかけは、一義的な定義を与えることで満足することがないのである。

このことは「真理の力強さ」という隠喩使用の展開を素描する『パラダイム』第一章でもまた触れられている。真理の探究は「真理とは事物と知性の合致である」という伝統的に与えられてきた定義によって充足されるものではない。そのことは、本来的には概念で語るはずの哲学者たちが、メタファーによる語りをむしろ大に行ってきたという事実において理解される。このことはこれまで明示的に主題化されることがなく、副次的なテーマに留まってきた。しかし、とブルーメンベルクは言うのである。「しかしながら、思考の基底層にはこれらの問いへの回答がいつでもあらかじめ与えられており、哲学の言葉のはしばしにその「手がかり」を見つけることができる。——われわれはそのように主張したい。もっともその回答は、体系の内に命題として含まれているものではなく、潜在的に浸透してある種の陰影を与え、構造化を促す動向として働き、効力を発揮している」（『パラダイム』12-13）。

## 5. 第五テーゼ——絶対的メタファーはどのような問いへの答えか

次の比較的長い第五テーゼは『パラダイム』第二章「真理の隠喩法と認識の実効的機能」冒頭（『パラダイム』27-29）と対応している。まずは先立つ第四テーゼおよび『パラダイム』第一章における「問い」の議論が引き継がれる。すなわち前節で確認したように、絶対的メタファーとは「前体系的な性格をもつ問い」への応答だ、ということであった。ここではさらにそのような「問い」がいかなる次元に基づくものであるかが追究される。さらにその帰結として「メタファー学」がどのような作業であるか、また「絶対的メタファー」の真理とはいかなるものであるかが語られる。

V.

レッシング〔は以下のように述べている。〕「それらの（メタファーの）本質はどこにあるのか。それは、それらが厳格な真理のもとには決して留まらず、それ以上のことを言ってしまったり、あるいは十分に言わなかったりする、というところにある。〔アレクサンダー・ポープのような〕ボヘミア人氣質のある形而上学者だけがそれを許されうる」。

（またしてもデカルト的に）真理（veritas）が検証可能性（verificabilitas）と見なされるなら、絶対的メタファーは〔そうした〕真理を述べるとか述べるができるといった事情にそもそも関わるものではない——このことが絶対的メタファーの本質である。絶対的メタファーの語る内実は本質的に検証可能なものではない。というのも、それは原理的に解答不可能ではあるが、それでも絶えずそれ自身で生存を根拠として立てられるがゆえに消去不可能であるような問い（prinzipiell unbeantwortbare, aber darum doch nicht eliminierbare, weil sich ständig selbst im Daseinsgrund stellende - Fragen）に「応答する」ものだからである。例えば、「真理が威力を発揮する」のか「真理を制圧する」のかというアンチテーゼのどちらかをそのつど理論的な仕方では決めることは不可能なのである。

メタファー学というものはメタファーを使用するための方法を説くものではありえない。メタファーが証言としての価値を持つのは、語る者自身はいかなるメタファー学も所有してはいなかったし、所有することもできなかったという前提があるからである。その意味で、メタファーとは本質的に歴史学的対象なのである。メタファー学を研究する者として、われわれは、メタファーの中にかの解答不可能な諸々の問いに対す

る〔決定的な〕「答え」を見出す可能性を断念してさえいる。結果として、これらの問いを無意味なものとして切り捨てるという（実証主義的な）解決へと至ることもあるし、あるいは、そうした解決が問いの頑なさの抵抗にあって貫徹できない場合には、絶対的メタファーの創出を芸術に委ねたりもする。

それでは、いかなる意味で絶対的メタファーは「真理」を持つのか。この真理は、きわめて広い意味で、*プラグマティック* (*pragmatisch*、実用的、実効的)である。その内実は世界に対する振舞い (*Weltverhalten*) を規定し、担っている。諸々の態度、期待、活動と無為、ないし時代を統制しているのは、基底的な確信、憶測、価値評価である。絶対的メタファーはそれらをわれわれに指し示してくれる。

「世界とは何か」という問いは、繰り返しメタファーの中で「生き抜いて」きたものであり、今日においてもなお、保護の対象として一カ所に押し集められ、それによって先鋭化している芸術のいろいろな現れの中で生き抜いているような「暗黙の問い」である（〔そのような問いへの応答として、例えば〕生き物としての世界、洞窟としての世界、鏡としての世界、書物としての世界、橋としての世界、劇場としての世界、時計仕掛けとしての世界など〔のメタファーがある〕）。カント以降、全体としての世界についての問いはもはや理論的には立てられえない。しかしそのようなメタファー的な「モデル」の持つ方向づけの機能 (*Orientierungsfunktion*) が、それによって否認されているのでは決してないのである。(Thesen 188)

### 5-1. 絶対的メタファーはどのような問いへの答えなのか

「絶対的メタファー」の応答する「問い」について、第五テーゼと同様に『パラダイム』第二章では次のように述べられている。「メタファーは、「厳密な真理」どころか、そもそも「真理」を語らない。見かけは素朴でも原理的に正解のない問いのかずかずに「応答」するのが、「絶対的メタファー」である。それらの原理的な難問は、われわれが自主的に立てるのではなく、生存の事実のうちであらかじめ立てられているからこそ、消去できず重要なのである」（『パラダイム』28）。すなわちここで問題となっている「問い」とは、哲学的ないし学問的な立場が任意に設定するものではなく、むしろ人間が有限的存在者として生きているということに基づいて突きつけられてくるものだとして理解することができる。「真理とは何か」や「世界とは何か」というものはまさにそのような種類の問いである。メタファーはそのような問いに応答する。すなわち生きているかぎり回避することができず、しかもそのう え明瞭判明な概念によっては把握することのできない問題に直面したとき、急場凌ぎの埋め合わせとしてあてがわれるものこそ、メタファーにほかならない。まとめるなら、ブルーメンベルクが「絶対的メタファー」のさまざまな使用方法から読み取ろうとするのは、まさにそのようなかたちで浮き上がってくる人間的生の実相である、と言えよう。

### 5-2. メタファーの歴史へと迂回する

「絶対的メタファー」に関する考察は「メタファー学」固有の視座を開くものであり、ブルーメンベルク自身の根本的な関心を示唆するものである。繰り返し強調するが、「メタファー学」で扱われるメタファーは原理的に解答不可能な問いへの答えだとされている。この認識が「メタファー学」の基本的

な関心と態度を支え、従来の哲学的思考とは異なった視野を開くのである。問いを正面から受け止め、メタファーを使用して困難な状況を打開しようとする者は、いまだ何かしらの漠とした期待を抱いているはずである。それは決定的な解答への揺るぎない確信かもしれないし、問いをうまい具合に隠蔽し、さまざまな理論上ないし実践上での困難を回避することへの望みであるかもしれない。いずれにしてもそのようなものが伴わなければ、そもそも何かを語り出すことはできないだろう。それに対して、生存に関する問いを「原理的に解答不可能」で「消去することができない」ものとみるブルーメンベルクの態度には、問いへの直接的な解答に対する断念のようなものが見受けられる<sup>(7)</sup>。ブルーメンベルクをはじめとするメタファー学者は、メタファーをもって語る者ではありえない。

「メタファー学」に斬新で含蓄に富んだメタファーによる問いへの深遠な解答を期待しても無駄である。だとすれば「メタファー学」が狙うものとは何か。それについて理解するには、この断念に伴っているより深刻な要求について念頭に置くべきだろう。メタファーで語ることの断念はもちろん、概念的な立場への回帰を意味するものではない。概念へと還元することが不可能であるという「絶対的メタファー」の本性が、その道を閉ざしている。そのうえで、みずからメタファーを駆使して問いに答えようとすることも拒否されるのである。

だとすれば「メタファー学」とは最終的に哲学的な探求の放棄へと帰結するものなのだろうか。そうではない。むしろこの断念は探求を別の方向へと定めるものである。「メタファー学」は解答を与えるものではないが、人が解答を与えようとする姿に関心を持つ。本稿の冒頭で触れたように、ブルーメンベルクは思想史記述を思考のスタイルとする。そのこだわりも、ここから



明らかとなる。直接問いへと向かうのではなく、むしろ哲学史上で確認される問いへのさまざまな取り組みの痕跡としてのメタファーへと「迂回」する。あえてまわり道を選択し、諸々の解答に取材することで、答えることへと駆り立てるものを浮き彫りにしようとするのである。「メタファー学」の本来的な対象とは歴史的に現れた諸々のメタファーである<sup>(8)</sup>、という言はこのように、思考のラディカルな方向転換の要求として理解することができよう。

### 5-3. 絶対的メタファーのプラグマティックな真理

「テーゼ」講演と『パラダイム』に特徴的であり、他の著作ではあまり見ることのできないものとして、「絶対的メタファー」の真理が「きわめて広い意味で、プラグマティックである」と説明されていることが挙げられる。ここでの「プラグマティック」(pragmatisch)という言葉の用法を理解するために、『パラダイム』第二章の記述を参照しよう。「この〔絶対的メタファーの〕真理は、きわめて広い意味でプラグマティックである。絶対的メタファーの内実は、理解のさまざまな方向のなかから拠り所となる一つの方針を絞りこみ、世界に構造を与え、経験も概観もできない実在の全体を表現する。それぞれの時代の生き方や希望、活動や無為、憧憬や失望、関心や無関心を決定してきたのは、その時代を担う基底的な確信や憶測や価値づけであるが、絶対的メタファーは、それらを歴史的に理解する指標となる。「それ〔真理〕はどのような純粋な手引きを提供するのだろうか」。プラグマティズムが投げかけたこの「真理についての問い」の形式は、「プラグマティズムによく見られるように」生物学を考慮すると否とにかかわらず有効である」(『パラダイム』29)。ここでの英語引用——「それ〔真理〕はどのような純粋な手引きを提供するのだろうか」(*What genuine guidance does it give?*)——に関連して、『パラ

『パラダイム』新版（2013年）の編集者であるハーヴァーキャンプはその注釈で、ウィリアム・ジェイムズによる1906年の講義「プラグマティズムの真理概念」（Pragmatism's Conception of Truth）を引き合いに出し、そこで「価値のある導きの機能」（function of a leading that is worth while）と定義されている「手引き」（guidance）という概念に着目している<sup>(9)</sup>。メタファーが暗に示す内容ではなく、問いへと応答することで果たされるその「導き」の「機能」への着目は、まさにジェイムズ的なプラグマティズムの立場とブルーメンベルク「メタファー学」の一致するところだと言えるだろう。あまり注目されていないコンテキストであるが、ブルーメンベルクの哲学史的な位置を理解するうえでジェイムズはじめアメリカのプラグマティズムとの関係はさらに詳細に検討されるべきテーマとなるにちがいない<sup>(10)</sup>。

それでは「絶対的メタファー」の果たす機能とはどのようなものだろうか。それについて、ブルーメンベルクは第五テーゼで「メタファー的な「モデル」（Modell）の持つ、方向づけの機能（Orientierungsfunktion）」だとしている。この機能がどのようなものであるかについて、『パラダイム』では次のように言われている。「表面に現れる情感的徴候のさらに下層には、それらの徴候を可能にする種々の「方向づけ」が存在する。これらの「方向づけ」は、メタファーの形で表面に現れるごく基本的な「範型イメージ」に照らして「読み取られる」のである」（『パラダイム』13）。メタファーのあり方は歴史的文脈に依存しており、そのつどの状況から生じる要求に応答するものであるがゆえに多様である。それでも、メタファーのもたらすイメージは一般的に、思考や行動に対する「拠り所」を提供し、プラグマティックな「手引き」としてそのつどの世界把握を背後から支えている。こうした機能に着目すれば、「絶対的メタファー」の基礎的で統一的なあり方を導き出すことができるのである。

## 6. 絶対的メタファーの背景的なモデル機能

「絶対的メタファー」のこの「方向づけ機能」は、『パラダイム』では「メタファー的な背景——「暗示的モデル」とでも呼ぶべきもの」（『パラダイム』19）ないし「メタファーの暗示的な使用、つまりわれわれが「背景隠喩法」と呼んだもの」（『パラダイム』177）とされている。それを端的に提示しているのが次の第六テーゼである<sup>(11)</sup>。

### VI.

もっぱら「術語法的」な語りのみがなされる場合でも、手引きとなるイメージに目が向いていないのであれば、それらの語りを持つ意味の統一について理解されることはまったくできない。つまりこうした場合でも、メタファーはモデル機能 (*Modellfunktion*) を持つのである。ここでとりわけ、対立的なメタファーのタイプの間での先行的な決定が役割を演じている。例えば有機体か機械かという基礎表象の二元論の内部でどちらを選択するか、という場合である。言語はわれわれに先んじて考えているというだけではなく、われわれが世界を見る仕方のもつていわばわれわれの「背後に」(im Rücken) 立っている。より強制的な仕方では、われわれはイメージの選択と貯蔵 (*Bilderwahl und Bildervorrat*) によって決定されており、われわれが一般に「経験にもたらず」ことができるものにおいて「誘導され」(*kanalisiert*) ているのである。(Thesen 189)

「背景」に関わる問題系としてのこのテーゼと対応しているのが、『パラダ

イム』第六章「背景隠喩法としての有機体と機械」である。その冒頭では次のようにまとめられている。長くなるが決定的な箇所なので第一段落の全体を引用してみたい。「術語的な概念だけで綴られている文章であっても、隠喩法（メタフォーリク）は一役買っている。たとえ術語的・概念的な文章でも、そこに働く主導的イメージが「読み解かれ」なければ、文章全体の意味を統一して理解することはできない。感覚的直観を叙述する表現にしても、その意味を理解するには、読み手はある一定の表現型に即してイメージを思い浮かべる必要がある。やがて人類初の月面着陸の一報がもたらされるだろうが、その（近い将来の）報告は、証言する宇宙飛行士がどの国の出身かによって叙述の表現型が変わってくるだろう。その報告ではアメリカやロシアの地理的イメージが引き合いに出され、われわれ〔ドイツ人〕を戸惑わせるかもしれない。思弁的表現の体系を読解する場合でも、読者が著者の思考を追いかけ、著者のイメージの世界に没入し、その「喩え（メタファー）」を実感したときに、初めて納得いく解釈が「成立する」。真の思想家は、自らの「体系」の全方位を実感とともに把握しているが、それと違って学流の亜流（エピゴーネン）は、もともとの諸概念を本来の土壌から「引き抜いて」自分勝手に単純なモデルへ移し替えてしまう。もとより解釈の過程では、「背景隠喩法」（Hintergrundmetaphorik）と呼べるそうした比喩表現は、何らかの表現型の領域でのみ浮かび上がらせることができる。両極端のタイプのメタファーの場合、例えば「機械」対「有機体」という主導的イメージのどちらかを基盤として採用するかによって、解釈の方向は容易に定まってくる。言語はわれわれに先立って思考するだけではなく、世界を見るわれわれの「背後」でも働いている。イメージの蓄積とイメージの選択は、われわれを必然的に規定し、見ることのできるもの、経験しうることの「道筋をつけている」。いまはまだ

その可能性を断定すべきではないが、ここにこそメタファー学の「体系論」の真義があると言ってもよいだろう」（『パラダイム』141-142）。

この『パラダイム』第六章と講演の第六テーゼを比較するなら、「テーゼ」講演の段階では「背景隠喩法」という術語がまだ用いられていないこと、また『パラダイム』で明言されているような、「メタファー学」の本来的な部門である「体系論」との関連性に触れられていないことが挙げられる。しかしながら、第六章という位置づけのために「背景隠喩法」の重要性を埋没させている『パラダイム』とは異なり、この第六テーゼが実際に「テーゼ」講演の結論であることを踏まえるならば、「メタファー学」の考察全体がどこに収斂するものであるかはむしろ後者のほうが明確に示しえていると言えるだろう。それこそまさに、「絶対的メタファー」の背景的な方向づけの機能についての立証と解明にほかならない。

## 7. 第七テーゼ——絶対的メタファーの歴史の諸類型

「テーゼ」講演の最後である第七テーゼでは、メタファーのさまざまなあり方が、「メタファー学」に想定される作業領域として提示される。これらの一覧化されたメタファーの働き方は、『パラダイム』の第七章から第十章までの各章と対応しており、そこで論じられるものである。

### VII.

諸々のメタファーの歴史の類型論 (*Typologien von Metaphergeschichten*)  
 は、メタファー学の中心テーマではなく、さしあたりはその分析が作業

としてどこまで可能なのかを直観化するための補助手段であるに過ぎない。

- 1) 神話からメタファーへの移行（プラトンの例）
- 2) 翻訳可能なメタファーの絶対化〔隔絶化、Verabsolutierung〕（プラトンの洞窟と新プラトン主義におけるコスモス＝洞窟）
- 3) メタファーから概念への移行（「真理らしさ・蓋然性」）
- 4) メタファーの応用（数学におけるメタファーの使用、人間中心主義的なメタファーとしての天動説）
- 5) 突破のメタファーの使用（Sprenghmetaphorik）。突破のメタファーはあるイメージを呼び起こすことで、実現不可能な属性ないし変形規則によって再び破壊し、それによってある事柄の超越をいわば「体験可能」にする（思弁的神秘主義が使用するメタファーのタイプ）。
- 6) しばしばアレゴリーとの境界を踏み越えて、メタファーを内在的に紡ぎ出すこと（「光が燃える」）。
- 7) モデルとして捉えられたメタファーをそれがはじめに持っていた基層の批判へと転化させること（「神は光である」から啓蒙主義による啓示批判の原理としての「光」へ）。（Thesen 189）

これらの類型論的記述に留まることは、しかしながら「メタファー学」本来の狙いを矮小化するものだ、とブルーメンベルクは注意しているが、それについて『パラダイム』第七章「神話と隠喩法」の冒頭で、「メタファー学」が持つ哲学的意義と絡めて言及している。「メタファーの歴史の類型論」といったものを確立し、諸範例（パラダイム）に即して立証することを試みることはできるだろう。とはいえ、われわれの考えるメタファー学は、そのよ

うな類型論を主題とみなし、その実際の達成を目的や理想としているわけではない。それどころか、メタファー学とはいつでも概念史の部分的課題、ないしは概念史そのものの全体であるにせよ、あくまでも哲学の補助学であることをしっかり肝に銘じるべきだろう。そもそも哲学とは、自らの歴史から自己を理解し、現在の課題に取り組むものである。その哲学の補助学という意味で、メタファーの歴史の類型論は、哲学の歴史的自己理解の諸相——おそらくは新たな諸相——を取り出し、区別することを目的とする。ここでメタファーのさまざまな「移行」を考察することで、メタファーとその表現形式の特殊性がより鮮明になることだろう」（『パラダイム』173）。

ここで言われる「哲学」とは、これまでの議論を踏まえるのであれば、「メタファー学」の「体系論」として、「絶対的メタファー」が背景モデルとして持つ方向づけの機能を解明することだと考えられる。たしかに第五テーゼで語られたように、実存の問いへと直接的に応答するという仕方を断念することで、「メタファー学」の視点は獲得されたはずである。しかしそれは探求の断念を意味するものではなかった。しかも「メタファー学」の視点転換は、もちろん歴史学的探究を思考のフィールドにするものであったわけだが、思想史の記述を自己目的とするものではなく、思考と感覚のあり方を背景で方向づけているものを理解するという新たな自己知を開拓するために必要な「迂回」を正当化するものだったのである。

**おわりに われわれに先立って思考し、かつわれわれの背後にある言語**

「テーゼ」講演（1958年）や『パラダイム』（1960年）の頃のブルーメンベルクは、「メタファー学」を三つの作業領域に区分していた。すなわちメタ

ファー学の「パラダイム論」、その「体系論」、および「メタファーの歴史の類型論」である。その区分けを踏まえるなら、前節で確認した「哲学」の「補助学」(Hilfsdisziplin)には、「パラダイム論」と「メタファーの歴史の類型論」の前二者があてはまる。それに対して「メタファー学」の「体系論」こそ、ブルーメンベルクが最終的に向かう気持ちでいたはずの、彼の「哲学」の実相ではないかと予想されるのである。仮にそのように理解することなく、メタファー学の「体系論」のさらにその先に、すなわち「絶対的メタファー」の分析を超えるところに、何らかの「哲学」が別に準備されていると考えるのであれば、「絶対的メタファー」こそが「哲学的言語の克服されざる根本要素」(第二テーゼ)であるという「メタファー学」の基礎認識は否定されてしまうのではないか。

とはいえ、導入部と本論とを分けるこのような伝統的な学問体系構築法には曖昧さが伴っている、というのはたしかであり、後年のブルーメンベルクは「メタファー学」のこれらの分類そのものを結局のところ放棄することになる<sup>(12)</sup>。それに伴って「メタファー学を研究する者」としての「われわれ」という、どこかまだ近代ドイツ的な「学」の理念を残していた立場設定もまた修正されていくのかどうか。あるいはそれでも「テーゼ」講演に見られるような、彼の根本的な関心が変化することはなかったと言えるのかどうか。これらの課題に説得的な仕方では答えるためにはもちろん、後期の「非概念性の理論」構想を含めたより広範で詳細な検討が必要だろう。

「絶対的メタファー」は生存に根拠を持つがゆえに原理的に消去することのできない問いへの応答であり、しかもその応答が持つイメージは人の生を背後からプラグマティックに方向づけ、基礎的な世界把握を用意する。人がつくるものによって、人はまたつくられる。それがまた次の何かを予期せぬ仕



方で促していく<sup>(13)</sup>。この再帰的な循環関係としての言語世界のリズムと機能を歴史的に現象したさまざまなメタファーの受容と再利用のネットワークから読み取ること。それが浩瀚とときに過剰なその思想史記述の背景にある、ブルーメンベルクの哲学的人間学なのであった。

追記：本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援（課題番号20K21929「ブルーメンベルク神話・宗教論における文化哲学的受容概念の研究」）の助成を受けた。

## 註

- (1) Hans Blumenberg, Paradigmen zu einer Metaphorologie, in: *Archiv für Begriffsgeschichte* 6, Hamburg: Felix-Meiner, 1960. [ハンス・ブルーメンベルク『メタファー学のパラダイム』村井則夫訳、法政大学出版社、2022年]。以下、本論文では特別な場合を除いて『パラダイム』からの引用は村井訳を使用する。
- (2) Margarita Kranz, Begriffsgeschichte institutionell, in: *Archiv für Begriffsgeschichte* 53, Hamburg: Felix-Meiner, 2011, S.186-189. 以下で参照する「テーゼ」講演のテキストは、「概念史評議会」に関するマルガリータ・クランツのこの論文のなかに掲載されているものであり、クランツはその原稿をブルーメンベルクの娘であるベッティーナ・ブルーメンベルクから閲覧許可を得て掲載したものであると付している（Kranz, S.186, Fußnote 3）。日本語への翻訳にあたっては私訳を用いたが、その際にブルーメンベルク哲学研究会で共有されている林遼平氏の既訳を参考にし、村井訳『パラダイム』と重なる部分ではできるかぎりすり合わせた。引用の際にはThesenを略号として用いる。また、研究会の参加者リストについてはKranz, S.224-226 参照。
- (3) 「メタ運動論」や「歴史の歴史性」という主題についてはとりわけ教授資格申請論文「存在論的距離」を参照。Hans Blumenberg, *Die ontologische Distanz: Eine Untersuchung zur Krisis der philosophischen Grundlagen der Neuzeit (1950)*, Berlin: Suhrkamp, 2022.
- (4) 『パラダイム』冒頭と「テーゼ」講演の第一テーゼとを比較して気づくのは、哲学の最終状態について、後者が現象学的なタームを用いて描写しているという点である。それに対して『パラダイム』にはそれが表立っていない。

- (5) 1971年の論文「パラダイム、文法的に」で、ブルーメンベルクはトーマス・クーン『科学革命の構造』の「パラダイム」理解に触れながら、科学史に関連させて比喩的に用いられた「パラダイム」という術語の系譜をさらに19世紀初頭のリヒテンベルクの用法にまで遡って探っている (Hans Blumenberg, *Paradigma, grammatisch*, in: *Wirklichkeiten, in denen wir leben*, Stuttgart: Reclam, 1981, S.157-162)。「メタファー学」への導入としての「パラダイム論」という位置づけに関する問題については本稿の最後で再度触れることにしたい。
- (6) このような性格を捉えて、ブルーメンベルクは後年の『鑑賞者のいる難破船』でメタファーを「示準化石」と表現している。「この意味で諸々のメタファーは、理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石 (Leitfossilien einer archaischen Schicht des Prozesses der theoretischen Neugierde) である」 (Hans Blumenberg, *Schiffbruch mit Zuschauer*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1979, S.87)。
- (7) ここでの問題設定に含まれる「失望」について、後年ではさらにはっきりと表明されていくようになる。それは例えば『鑑賞者のいる難破船』(1979年)の、先に注で挙げた同じ箇所にも見られる。「われわれが学問に対して真理なるものを期待することができないということをもう認めなければならないとしても、いまや知ることの失望に結びついているものをなぜわれわれが知ろうと欲したのか、われわれは少なくともそれを知ろうと欲するのである。この意味で諸々のメタファーは、理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石である」 (Blumenberg, *Schiffbruch*, S.87)。また『世界の読解可能性』(1981年)にも呼応する態度を確認することができる。「「われわれは何を知ろうと欲していたのか (Was wollten wir wissen?)」——それが、カント『純粹理性批判』以来200年の間で、「われわれは何を知りうるのか (Was können wir wissen?)」というその根本の問いに取って代わった問いであるかもしれない」 (Hans Blumenberg, *Lesbarkeit der Welt*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1981, S.2)。
- (8) 『パラダイム』第二章では次のように述べられている。「しっかり銘記しておくべきだが、メタファー学の目的は、メタファーの用法を説いたり、メタファーの運用で生じる問題に対処案を示したりすることではない。そもそもメタファー学を手がけるつもりなら、その時点ですでに、かの正解のない問いに対する「解答」をメタファーのうちに見出せると考えてはならない。本書で扱うメタファー学では、その主題であるメタファーを、本質的に歴史的な対象とみなすため、それが証言としての価値をもつのは、発言者自身がメタファー学のような発想をおよそ

- もつことなく、それを予想すらしていない場合に限られる」(『パラダイム』28)。
- (9) Anselm Haverkamp, 2. Stellenkommentar, in: Hans Blumenberg, *Paradigmen zu einer Metaphorologie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2013, S.311.
- (10) なお『パラダイム』第五章は、「未知の土地」(terra incognita)と「未完の宇宙」(die unvollendete Welt)を手がかりとして「世界」に関する「絶対的メタファー」が持つ「実効的(プラグマティック)な機能」(『パラダイム』119)を主題化している。
- (11) 「背景」の問題をブルーメンベルク思想展開に即して追跡したものと、下田和宣「背景化する隠喩と隠喩使用の背景——ブルーメンベルクをめぐるひとつの哲学的問題系」、京都哲学会編『哲学研究』、606号、25-64頁を参照。
- (12) 1971年の「メタファーの観察」で、ブルーメンベルクは13年前の「テーゼ」講演を回顧している。とくにブルーノ・スネルによる絶対的メタファーの体系についての質問が発見的な意味を持っていたと述べている。そのうえでここでは、体系に対して「類型論の仕事」が先立たなければならないことの意義を、ディルタイを引き合いに出しながら高く評価している(Hans Blumenberg, *Beobachtungen an Metaphern*, in: *Archiv für Begriffsgeschichte* 15, 1971, S.164)。また、「メタファーの観察」と同年の1971年に発表された論文「パラダイム、文法的に」では、ブルーメンベルクはトーマス・クーン『科学革命の構造』の「パラダイム」理解に触れながら、科学史に関連させて比喩的に用いられた「パラダイム」という術語の系譜をさらに19世紀初頭のリヒテンベルクの用法にまで遡って探りながら、もともと「パラダイム」という言葉ないし考え方自体が、文法的な「語形変化表」に由来するものであって、リヒテンベルクおよびクーンの用法もそれを比喩的に転用したものであることを指摘している(Hans Blumenberg, *Paradigma, grammatisch*, a.a.O.)。すなわち、ブルーメンベルクによって明言されていないのであるが、「メタファー学のパラダイム」という表現自体がそもそもメタファーなのであり、メタファーの機能を入門的に分類しようとする『パラダイム』の試みが、すでにメタファーの運動に巻き込まれてしまっているがために挫折を余儀なくされることを示している、とも読める。
- (13) メタファーによる先行的な世界構築という事象について論じる際に、ブルーメンベルクがイタリアの文化哲学者であるヴィーコに言及している点は示唆的である。「テーゼ」講演にはないが、『パラダイム』序論の内部で2カ所ほどヴィーコの「想像力の論理」への参照がある(『パラダイム』2, 5)。ヴィーコは「絶対的メタ

ファー」の存在と意義をいち早く洞察しながら、それを古代世界の出来事にものみ限定することで、結局はデカルト主義に回帰してしまった、とされている。だとすれば、ブルーメンベルクの課題とは、ヴィーゴを反デカルト主義的に徹底させることである、とも言えるだろう。